

スイス州立チューリッヒ大学哲学部
卒業論文（日本語要約）

Die japanischen Kriegsgefangenen in Sibirien 1945-1956
Verarbeitung der Lagererlebnisse in Wort und Bild
『シベリアの日本人抑留者 1945－1956年
その体験を言葉と絵でどう表現したか』

ドイツ語卒業論文担当官：
エドアード・クロツフェンシュタイン指導教官

著者: リチャード・デーラー

リチャード・デーラー・訳

須美江阪依田・校正

2001年11月30日

ドイツ語卒業論文目次	(日本語要約の目次 146 頁参照)	頁
前書き		1
引用について		2
1. 手順、資料選択と論点の組み立て		4
2. 歴史的な背景		8
2.1 ロシアとソ連の日本との関係		8
2.1.1 第二次世界大戦までの紛争		8
2.1.1.1 満州		8
2.1.1.2 サハリンと千島列島		9
2.2 第二次世界大戦とその後		11
3. シベリアの日本人抑留者		12
3.1 ソビエト政府が日本人抑留者に課した強制労働		12
3.2 抑留者を保護するためのジュネーブ条約（1929年）		13
3.3 抑留者の数		14

3.4 シベリア収容所への抑留者の運搬	15
3.5 抑留者に対する 1941 年 7 月 1 日の法令	15
3.6 主な収容所	17
3.7 宿営と衛兵	21
3.8 食料	22
3.9 強制労働	25
3.9.1 強制労働の種類	25
3.9.1 労働ノルマ	26
3.10 余暇、休養、家族との通信	28
3.11 共産主義化	29
3.12 健康保持と衛生	32
3.13 病気と事故	34
3.14 死	35
4.体験の語り、絵	36
4.1 語り	36
4.2 絵と画家	36
4.3 シベリアへの運搬、宿営	43
4.4 食料、飢え	48
4.5 衛兵、刑罰、暴力	53
4.6 労働とノルマ	58
4.7 体力の消耗	64
4.8 衛生、病気、事故、死	67
4.9 余暇、休養、スポーツ	73
4.10 共産主義への変化	78
4.11 友情	83
4.12 自然、地方の人口	88
4.13 郷愁、送還	94
5.総括	100
今後の論点	105
6.文献	106
一次文献	106
二次文献	108
日本のインターネットサイト	110
7.付録	
7.1 満州地図	111
7.2 ハバロフスクーバイカル湖地図	112
7.3 バイカル湖地図	113
7.4 オムスクーモスクワ地図	114
7.5 シベリア横断鉄道 (BAM) 地図	115
7.6 日本行政区分『県』	116
7.7 絵と絵における論評	117
7.8 シベリア気候地図	119
7.9 抑留者に課す強制労働のための法令（ロシア原文）	120
7.10 食料割り当てに対する評価	121
7.11 抑留者保護を目的にした 1929 年ジュネーブ条約の付録	122

7.12 抑留者のスターリンへの感謝状（ロシア原文）	123
7.13 返信用葉書	124
7.14 履歴	125
英語要約	126/143
日本語要約	144/163
ロシア語要約	164/184

日本語要約(卒業論文の部分ではありません)	144
目次	145
1.前書き	147
2.歴史的な背景	147
ソビエトへの搬送	148
3.監禁生活	149
食糧割り当て	151
強制労働	152
労働ノルマ	153
余暇、スポーツ	154/155
共産主義への変化	155
衛生管理	156
死	157
友情	158
郷愁、送還	159
4.結論	159
文献	160
絵の目録	161
自己紹介	163

1.前書き

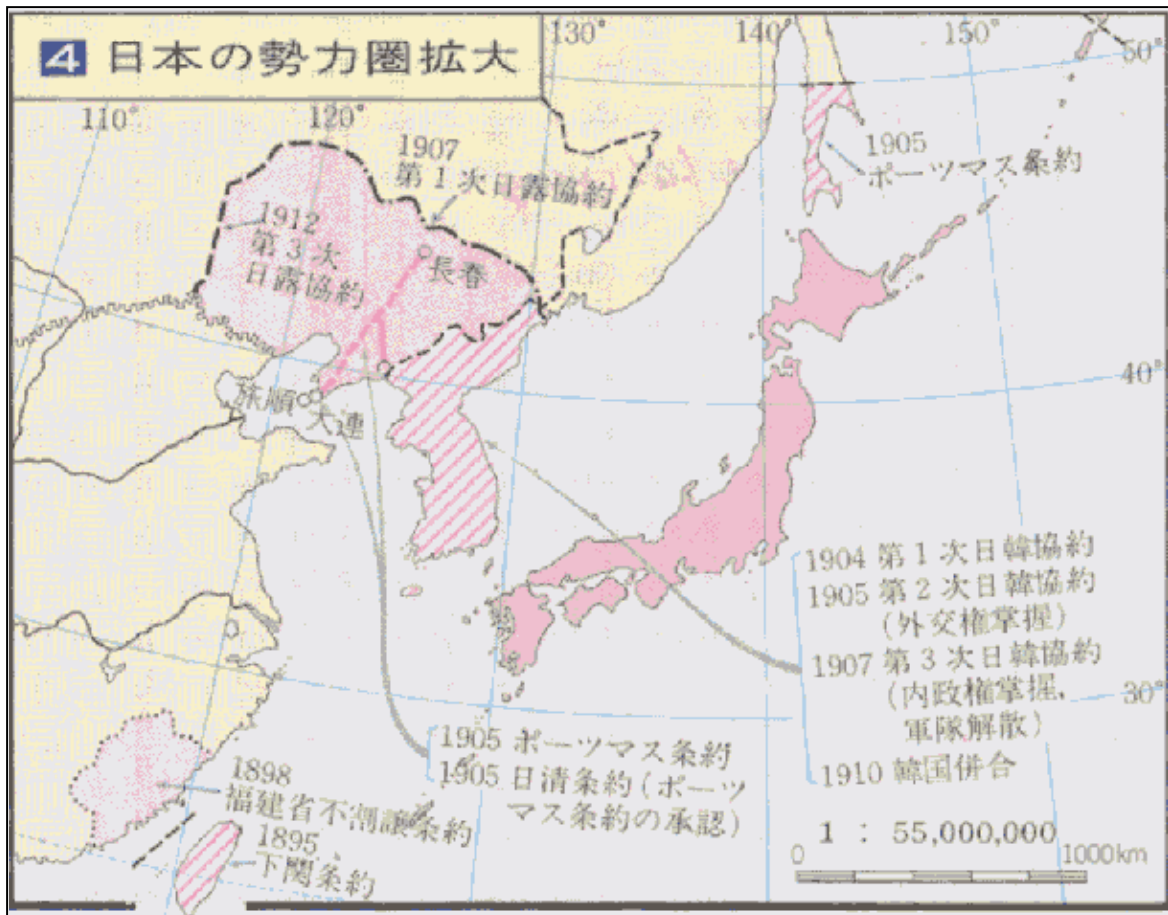
1950～2000年の間にソビエトでの抑留者体験者は自分達の費用で2000冊以上の本を出版し、自分達が監禁生活を強いられていた時に遭遇した苦難を語った。だが、それと同時にソビエトの医者や看護婦、住民や役人等から受けた厚情については感謝を述べている。

日本の経済状態がまだ発展段階であったのと、帰還兵が先ず社会復帰に専念しなくてはいけなかったことから、1950年代に出版された本は少なかったが、日本経済の発展と共に、1960年代から徐々に出版物の数は増加していった。抑留者としての経験が無い人にとって、絵付きの語りはとても興味をひいた。ラーゲリではどんな記録や絵でも厳しく禁止されていたため、これらの語りと絵は抑留者が自分等の記憶を辿って、後に作成したものである。

現在、ロシア公文書は部分的に利用することが出来るため、歴史家はその資料を使って研究をすることができる。ただし、最高軍事機密や政治レベルにおける出版物は次々と世に出てもてはやされているが、何人の日本人兵がソビエトの抑留者になったのか、監禁生活中に死亡した抑留者の墓場はどこにあるのか、抑留者がどのようなソビエト経済復興への寄与をしたのかなどといった、日本人抑留者が囚われている間の体験に対する興味は殆どと言っていいほど無く、一般的にシベリアでの彼等の運命は殆ど知られていない。私は彼等が監禁生活の日々の中でどんな環境の中で、どのような生活をし、何を感じていたのか、という事に焦点をあてた。そして、人は生命の危機を感じる時、それをどのように描写するのか？この問いを卒業論文のテーマとした。

2.歴史的な背景

1898～1900年に中国で起こった義和団の乱で、ロシアは1900年に満州全土を占領し、中国政府の東清鉄道または東支鉄道を造る特権を得た。1904～1905年の日露戦争。この戦争を起こした原因の一つとして、ロシアは満州の占領を続けたかった、ということが言える。1905年、ポーツマスの平和条約で、ロシアは中国の同意を得て、旅順、大連、近隣地域と領海を日本に貸与することを承諾した。だが実際は、満州北部はロシア、満州南部が日本へ割り当てられた。(独語論文10
頁地図参照)



1912年に先の先帝を挿入したほうがいい] が退位し、中国中央政府が倒れた1919年から満州は事実上独立した状態にあった。1931年、日本は満州の占領を開始し、1932年2月18日に傀儡国家として樹立を挿入したほうがいい] を宣言した。その結果、ソビエトと日本の間での緊張は次第に高まっていった。

1855年の日露和親条約で、ロシアと日本はサハリンを共同で行政管理することにし、国後、歯舞、色丹、択捉の南千島列島を日本に割り当てた。1875年、樺太千島交換条約により、日本はサハリンを放棄したかわりに全ての千島列島を手に入れた。その後、日露戦争での勝利により、日本はポーツマス講和条約（1905年）でサハリン南部を獲得した。

第二次世界大戦後、1951年のサンフランシスコ講和条約で日本は千島列島とサハリンを放棄したが、日本はこの四つの島を日本の北方領土である、と主張。しかし、ソ連はこの日本の主張を認めなかった。

1941年4月13日の日露中立条約は1946年4月に期限を迎えるはずだった。満期日の一年前に解約告知がなければ、条約は自動的に延期になるという条件があった。連合国はソ連に圧力をかけて新しい戦端を開くよう要求し、スターリンはド

イツ敗戦後に行うことを挿入した方がいい] 約束した。1945年8月8日午後5時、東京の日本政府、モスクワの日本大使は、ソビエト政府から日本への戦争を9日から始めるといふ宣戦布告をされる。モスクワ時間17時10分、極東では既に9日へと日付が変わっていることから、ソビエト軍隊は満州、サハリン、千島列島の攻撃を始めた。1945年9月3日、日本の降伏により、ソビエトによる攻撃は終焉を迎えた。満州、サハリン、千島列島に居た、およそ270万人の日本住民と兵士のうち、60万人の兵士が抑留者としてソ連に運ばれ、日本住民は送還されるか自力で帰国をすることとなった。

1945年7月26日にポツダムで行われた連合国宣言によると、戦争犯罪人以外の全ての日本人抑留者は送還させなければならない、となっている。ソビエト政府は8月にその宣言を支持したにも関わらず、送還させるつもりがなかった。1945年8月23日にソビエト国家防衛委員会は決定9898号に沿って日本人50万人を強制労働のためにソビエト収容所へ移送させられた。だが実際には、約58万人の日本人がソビエトへ搬送させられた。ソビエト政府は日本政府に数年間抑留者に関して誤った情報を知らせていたのである。

1929年の抑留者を防護するためのジュネーブ条約はソ連と日本に承認されていなかった。1946～1948年の東京軍事裁判では、東条英機前総理大臣がこの問題における日本政府の姿勢を説明した。彼が主張したとおり、日本と欧米では抑留者に対する扱いが全く違っている。その結果、兵士への厳しい命令に対してどんな状態であっても降伏はできない。ジュネーブ条約の承認は投降を促す目的があったのだ。条約の9条では、出来るだけ国と民族を分けた宿営を条件としているが、ソ連ではこれを文化や人種差別問題と見て承認しなかった。

3. 監禁生活

体験者の語りの内容は次のような期間で分けることができる。

1945年8月～最初の冬が終るまで

低下していく体力や恨み、自身の状況をも把握できずにいたが、同時に生き残りたいという意志と自己への規律もあった。宿舎、食料、強制労働、病気、事故と多くの死に遭遇しながらも、抑留者は新しい境遇に慣れるように努力していた。

1946年夏

語りの調子は少し良くなった。生命を失いかねない厳しい冬が終わり、死亡者数は減っていった。抑留者に希望を抱かせる日本への送還が始まって来た。

1946年冬～1948年夏

もう一度、生きて冬を越すことができるか。共産主義再教育がもたらした風潮は抑留者の共同生活を困難にさせた。共産主義化させられた仲間はラーゲリ生活を地獄のようにした。また、母国へ帰還出来る噂は盛んだったが、常に不確実な状態だった。送還は遅くとも続いているように伝えられていたが、誰も自分の帰国日を知らなかった。8月末までに抑留者の数は211,758人となっていた。

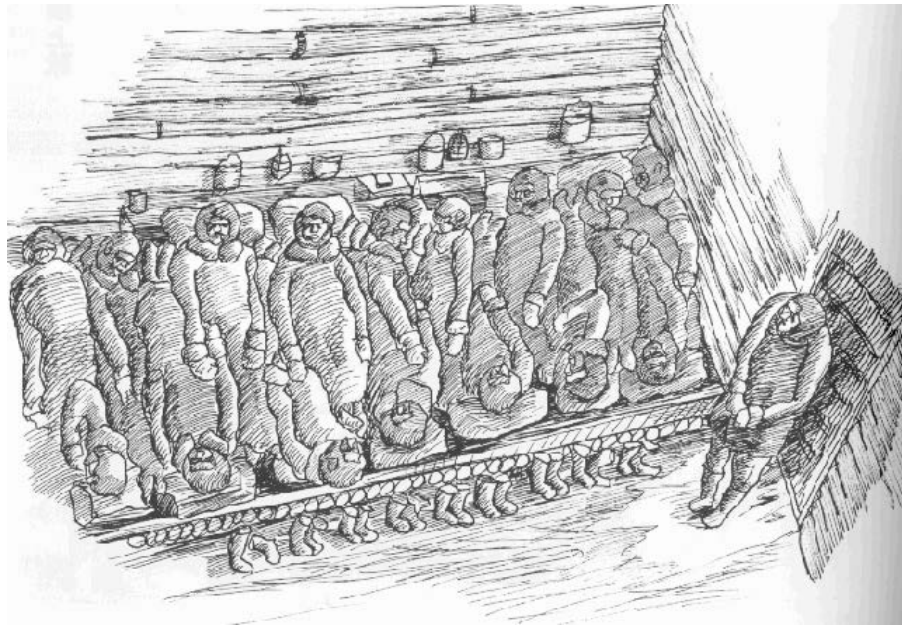
1948年夏～1949年

95,000人の抑留者がソビエトに残っていた。その抑留者の多くが囚われの身となっている間に、謂れのない罪を被せられ、戦争犯罪人としての判決を独断的に宣告されていた。生活事情がたつぷりと向上してきたことにより、語りと絵は明るくなっていった。ソビエト女や少女に対する共感や愛情が高まっていた。シベリアの気候はもはや恐怖の対象ではなかった。抑留者は気候にどのように立ち向かえばよいのかを理解するだけではなく、シベリアの自然の美しさを賛美することさえあった。

抑留者にとって、降伏のショックに続いて起こったショックが送還の拒否だった。本国へ送還する代わりに、誰にも知らされていない地へと運搬されたのだ。貨車に乗っていた時、ソビエト兵は抑留者に、敗者が本国へ帰還させられていると思わせるために、『まもなく家に』にと言う別れの挨拶を送った。が、貨車はためらうことなく南方向へ向かう代わりに、まず北へ、その後、西へと走って行ったことが抑留者に最初の疑問を抱かせた。佐藤は人で溢れ、停車中のごった返した貨車を描いている。¹ 抑留者が乗っていた方向とは反対に、予期していた通りの方向へ向かっている貨車には女の囚人が乗っていた。佐藤はその光景についてこう語っている。「自分達の抑留者輸送に比べ、護衛兵の数が多いことも異常であった。」この女の囚人は勇敢に戦うどころかドイツの抑留者となってしまったために、反ソ連分子とみなされていた。この時、抑留者は初めてソビエト政府が自国民をも遠慮なく取り扱っていることを知ったのだ。

¹ 佐藤清『シベリア虜囚記』未来社1979年、100頁。

この貨車で運ばれる行程と宿舎で過ごす最初の週の記録により、どのように抑留者が大変悲惨な状況に慣れなければならなかったのかということを知ることができる。2段積み貨車へ押し込まれて、食べ物は殆ど無く、屈辱的且つ不衛生な状態、崩れかけた宿舎、テントキャンプ、酷寒、そして帰還に関して抑留者を欺くべく流された不確かな情報は彼らをひどく落ち込ませた。佐藤は彼の絵『眠り』を次のように解説している。²(独語論文
45頁参照)

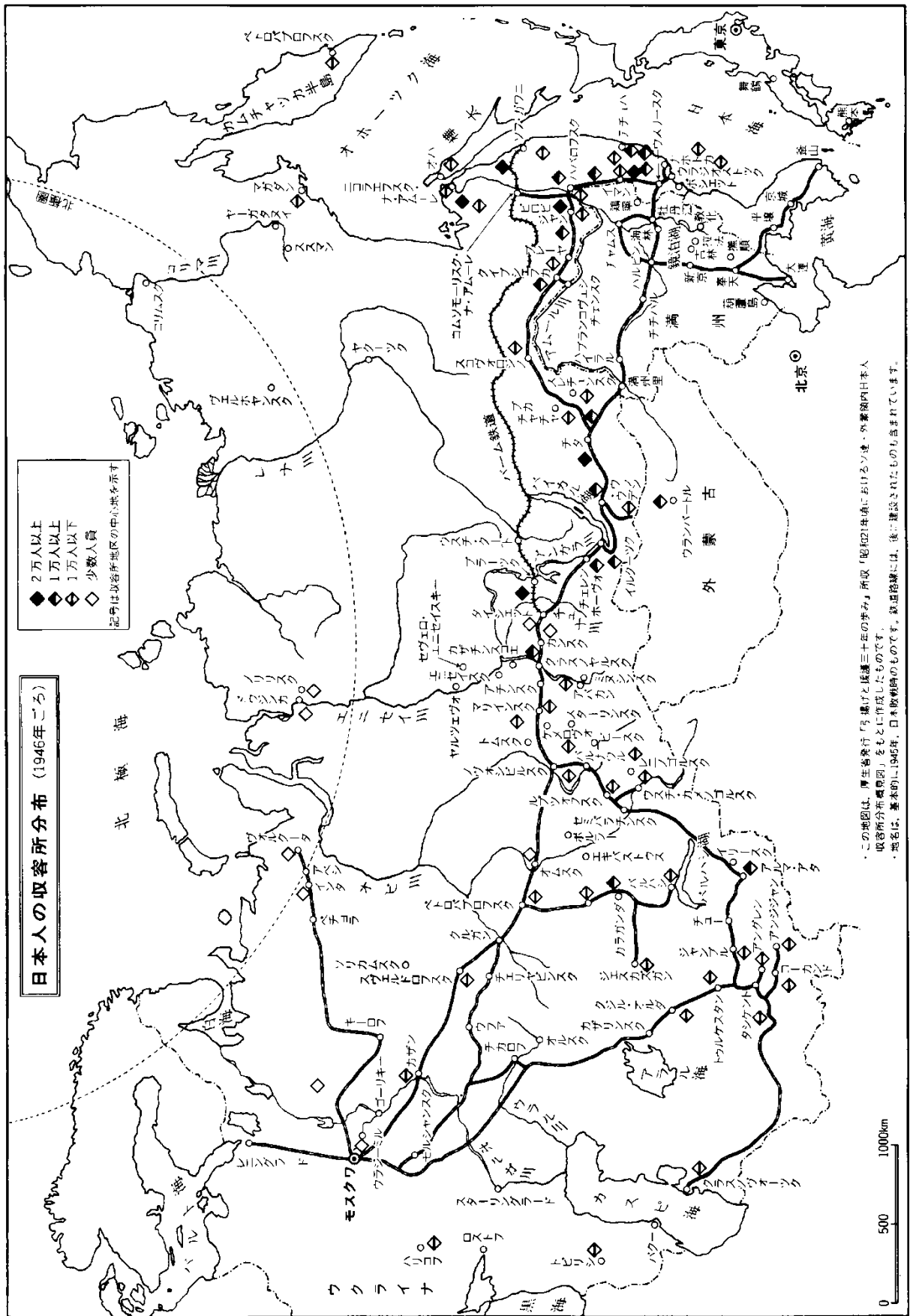


「シベリアに入った初めての冬は、収容所も狭く、八〇〇名を収容するのに、すし詰めありさまだった。建物は穴だらけで、屋根からは星空が見え、氷柱のさがった宿舎で、しばらく過ごさなければならなかった。[...]深夜の気温は零下三、四〇度にも下り、便所までは、遠いところで往復八〇メートル走らなければならず、体はすっかり冷えきってしまうのだった。[...]交互いになった戦友の足は、ちょうど鼻先にくるので、具合が悪かった。しかし同じ候補生ばかりなので、お互いにそこは我慢をし、ぴったり体をつけあって、寒さを防ぎ、眠りについたのであった。」

宿営はシベリア、極地圏からさらに北の地域 ヴォルクタ、ノリリスク、コルイマ、ウラジオストク、ハバロフスク、中央アジア社会主義共和国やカザフスタンへと広げられた。クズネツォーフによると、1945年9月1日、冬に気温は50度以下迄下がり、一年の内140~200日間は雪に閉ざされる地域に抑留者は収容させられた。(1997年51~53頁参照)

²佐藤清『シベリア虜囚記』未来社1979年、111頁。

各地域に収容された抑留者数は次の通りである。ウラジオストク75,000人、ハバロフスク65,000人、チタ40,000人、ウラン・ウデ16,000人、イルクーツク50,000人、クラスノヤルスク20,000人、アルタイ14,000人、カザフスタン50,000人、ウズベキスタン20,000人、以上の総計は340,000人となる。(独語論文20
頁地図参照)



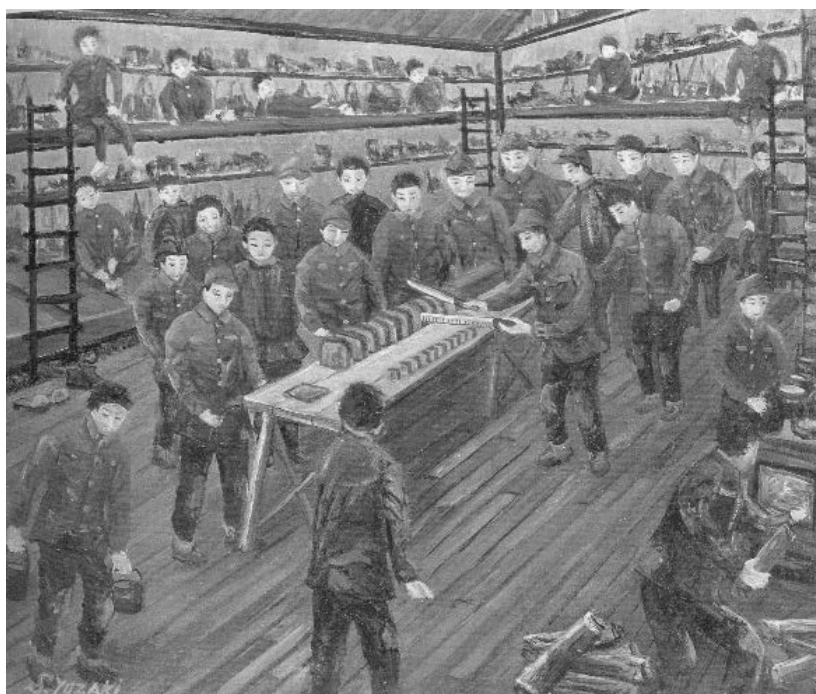
日本人の収容所分布 (1946年ごろ)

◆ 2万人以上
 ◆ 1万人以上
 ◆ 1万人以下
 ◆ 少数人員
 記号は収容所地区の中心地を示す

この地図は、厚生省発行「五ヶ年計画と建設三十年の歩み」所収「昭和21年度におけるソ連・外蒙領内日本人収容所分布概観図」をもとに作成したものです。
 ・地名は、基本的に、日本敗戦時のものです。鉄道路線には、後に建設されたものも含まれています。

内務省が1945年8月23日に法令で規定した毎日の食糧割り当ては全く守られていなかった。法令では異なる種類の肉体労働（例えば、鉱山労働や伐採や非常に厳しい気候など）に対する明確な労働条件を考慮していなかった。従って食糧不足の結果による栄養失調は語りと絵の中にも大きな影響をもたらしている。毎日の食糧の平均は1100～1300kcalと推定される。WHO基準によると、重労働をする場合の必要カロリーは、日におよそ3100～3300Kcalと言われている。死の主な原因はジストロフィー（栄養失調）だった。だが、ソ連国民もまた必要量の食糧を得ることができなかったことが指摘されている。フレイシュハッカによると抑留者とソ連国民の理論的な食糧割り当は少しだけ違っていた。（1965年V参照）兵士やラーゲリ当局による食料の盗みは普通だった。食料不足はラーゲリでの社会生活へ深刻な悪影響をおよぼしていた。数グラムのお粥やパンくずさえ、生き残るためにはきわめて重要だったために、各人に正確に同量を配分することはとても重大な作業であった。そこで、重量や大きさを計る道具として、簡単ではあるが精巧な装置が造られた。

勇崎の『黒いパンの分配』では、その様子を生々しく表現している。（独語論文⁵⁰参照）



黒
パ
ン
の
分
配
(ウランウデー第七大隊)

「[...]何と言っても黒パンは旨く忘れ難く、又唯一の固型の食糧であり活力源であった。ひとかけらでも喰べる事はたとえ食欲を満たすには程遠くともそれだけ生命を永らえる事になると信じていた。分配は必ず公平であり正確でなければならない。全員の真剣なまなぎし〜火を吐くような目〜その注視のもとに物指しを使ったり天秤計りで計ったりして等分に切り分けられ、更にそれをジャンケンで勝った者から順に狙った黒パンを取り手中に納める事になる。パンの両耳は穀物の密度が多く腹もちも良いとかでこれは又別に頭数だけに切り分けてサイコロのような大きさのパンとして本体に乗せ分配を終了するのである。[...]」

春になると状況が少しよくなった。周辺で新鮮な野草やベリー類等、食べられそうなものは何でも探し、秋には収穫の残りを取りに行った。毒キノコや未熟な野菜を食べた抑留者が病気になった場合もあった。

佐藤は、馬鈴薯と馬糞の出来事を描写している。(独語論文
48頁参照)



「馬鈴薯をバラ積みにしたトラックが、雪道を驀進して来る。急なデコボコの曲り角などでは、ときどき馬鈴薯をばら撒いていくときがある。[...]工場の往復には、ときたま、ころげ落ちた馬鈴薯に、ありつくことがあるので、曲り角などでは、キョロキョロあたりを見廻らすのであった。いっぺんそういうことがあると、道路に転がっているものすべてが、馬鈴薯に見えるから、不思議であった。石ころ、土ころは蹴ってみればわかるのだが、凍った馬糞だけは、実によく似ていて、間違っただけだ。ポケットに大事に入れて持って帰り、さて一人でご馳走になろうと手を入れてみたら、ほどよく溶けていて、狐にバカされたような顔をしたものだ。なか

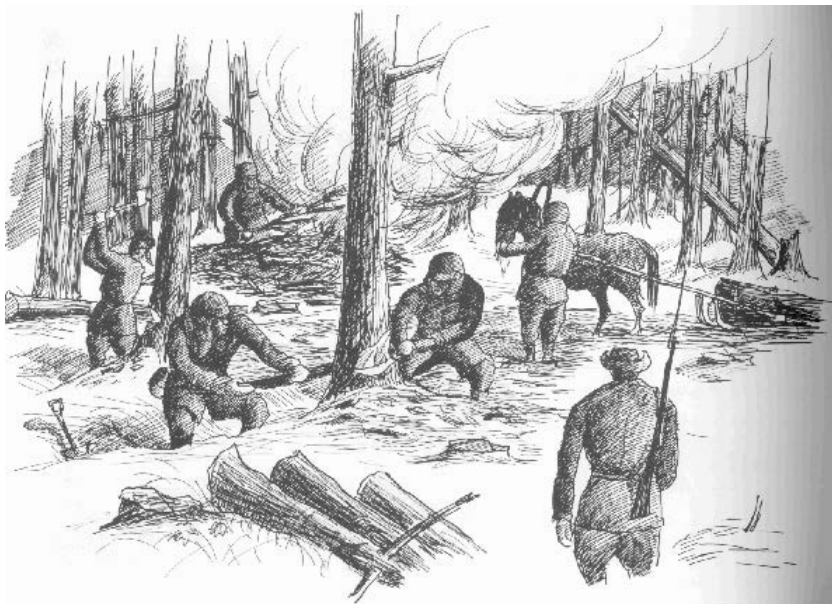
には飯盒に入れて、煮立て、蓋をあけてみたら、馬糞がぷかぷか浮いていたという悲劇を目撃することも、珍しくはなかった。」

パンとタバコはラーゲリの通貨となった。パンはどんな物とも交換することができた。

クズネツォーフは、次の主な**強制労働**とそれらに割り当てられた抑留者数を一覧にしている。(1997年90～91頁参照) 林業159,862人、鉱山業134,608人、農業74,731人、重工業50,597人、建築業と工場や住宅の修理50,871人、軍用と民間空港33,800人、鉄道建設と修理20,157人、発電所と電力装置15,674人、陸上と鉄道輸送機関の建設や修理111,500人、道路建設と修理9,953人、抑留者のための病院と厚生施設の建設9,076人など。抑留者には、ジュネーブ条約で禁止されている防衛工事も割り当てられた。日本人抑留者の主な働き場所の一つが、シベリア横断鉄道のバイカルーアムル線(BAM)であった。枕木の数だけ抑留者の亡き骸があると言われている。

伐採作業が一番危ない仕事であった。抑留者は職業訓練を受けたわけでもなく、特殊な技術があるわけでもなかったのも、彼らにとってその作業はあまりにも残酷なものだった。その記憶と絵は不慮の事故や絶望、そして病や死に溢れている。

佐藤はこう語っている。(独語論文
58頁参照)



「[...]伐採は、各ラーゲルの主要な仕事であった。伐採の小隊が山に入れば、それを下の集積所まで運搬する馬方がいた。[...]伐採の入った山からは、数本の煙が

たちこめ、大きな焚火は、翌日まで火が消えなかった。ノルマのごまかしは、数日前に切り倒した樹の、小口に記入した日付だけを、数センチ切り落として、日付を書きなおす。そして、さも今日のノルマのようにして報告をする。そうでもしないと、何時も A 食にありつくというわけにはいかなかったのである。鯖読は、しばらく日時がたたないと、監督は気がつかない。丸太数が足りないとわかって、A 食を食べてしまった後では、何かの間違いだろうなどと、平気なものであった。[...]

抑留者は労働賃金を貰わなかった。米国やイギリス、ニュージーランドと異なり、ソビエトでは行われた労働に対する証明書が交付されなかった。この労働証明書が欠けていることによって、日本政府は抑留者帰国者に対する補償を拒否した。1993年3月の裁定において、日本最高裁判所は政府の姿勢を認めた。

データとして残された**労働ノルマ**は毎日の労働量を定義していた。ソ連中のどこであっても、この複雑なノルマは有効で、厳しく守らなければならなかった。ロッシは色々な種類の雪の除雪作業について言及している。(1989年254頁参照)

「新雪、軽い雪、少し固まった雪、シャベルを使う時に足で踏ん張らなくてはいけなくらい固くなった雪、つるはしが必要なほど凍り付いてしまった雪。一連の係数はシャベルですくわれた雪の高さと雪を放り投げた間隔を考慮している。労働グループが完全な状態であったか不完全であったかに関わらず、グループ毎にノルマは割り当てられた。労働グループの中で、もし誰かが病気であったり体調が悪かったとしても、グループ内の他の仲間が余計に働いて補わなくてはならなかった。労働の成果は監督官によって判断され、大勢の幹部によって記録されていた。まさに「労働が悪いのではなく、労働のノルマが悪い」と言える労働環境だった。無慈悲でずる賢い監督官は抑留者の生活を地獄のようにつらいものにしていった。ノルマが達成できなければ食料の量が減少される。それは、誰にとっても恐ろしい事であった。それに対抗するために監督官や幹部を贈賄していた。抑留者も何とかごまかす方策を抜け目なく見いだしていたのだ。」1945年から1946年にかけての冬、ノルマの平均達成率は13%程度だった。これに加え、死亡者の数が多かったことがソビエト政府の深刻な懸案事項となった。

そこでは馬にもノルマが課されていた。佐藤は『馬にもノルマ』と『丸木の運搬』という絵を書いていた。(1986年148頁；145頁参照) 馬がノルマを

達成できなかった場合、飼葉の配給が少なくされた。だがその頃、飢えで自暴自棄になった抑留者は馬の飼葉までも食べていた。佐藤は『友達』という話をこう語っている。^(独語論文 84頁参照)絵の中で、馬方と馬は無言で話し合っている。



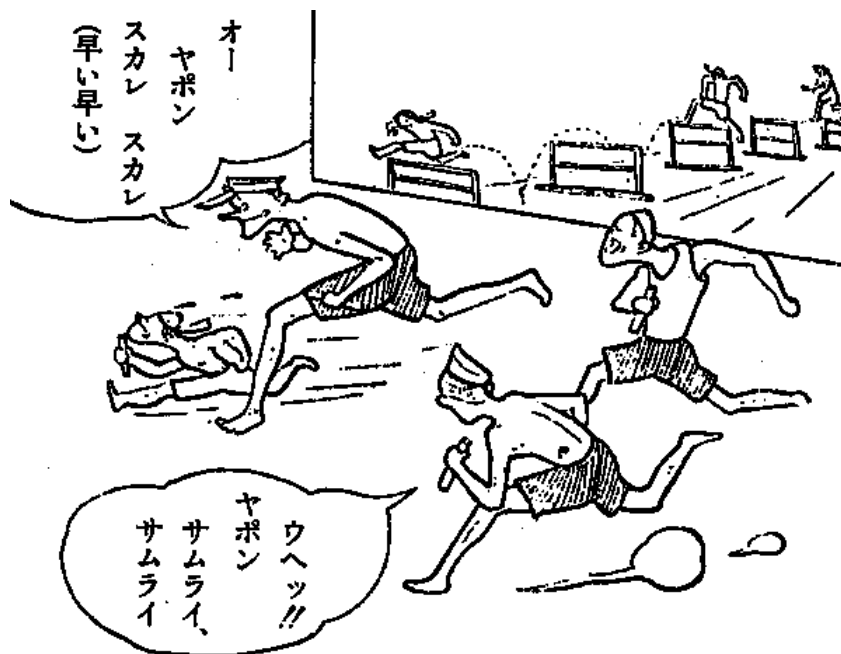
馬は友達になった馬方に警告する。「飼葉を友達に食べられていることをよく知っているけれど、馬も干草とワラばかりでは生き残れないんだ。」

佐藤は『馬方』という絵をこう説明している。(1979年144頁参照)

「入ソした始めの冬は、材木運搬に、関東軍の軍馬も多く使われた。馬格も大きく、チャン馬（土地の馬）よりも、はるかに馬力もあって、ノルマをよくこなした。しかし、それもほんの数ヶ月だけで、すぐに参ってしまった。零下三、四〇度の酷寒と、馬糧の不足では、とても長持ちするはずがない。馬方も腹ぺこなので、馬にやる僅かの燕麦を失敬してしまうのでは、馬も働けないわけである。ガタガタに瘠せこけた大きな馬が、滑る坂道を踏んばりきれずに、荷の重さに耐えられず、林の中突っ込んでしまうのには閉口した。[...] 馬方は馬装をはずして、橇をもとにかえし、また引かせようとするが、今度は雪道に座り込んでしまって、恨めしいように、後の荷を振り返り、哀れな眼をする。叩くこともできず、**B** 食覚悟で帰らざるを得なかった。荷を降し、橇だけをつけいざ帰ろうとすると、こんどは橇に足もかけないうちに、馬は走り出し、馬方をおいてきぼりにして、二キロも先の馬小舎まで、一

目散に駆け去ってしまうという、質の悪い馬もあった。貧弱な馬を持たされた馬方は、泣かされたもののだ。」

労働は毎日のように続き、休みの日は殆どと言っていいほど無かった。典型的な平日のスケジュールは、朝 5 時に点呼。6 時半に朝食。7 時から 14 時迄労働、仕事場迄は行進をする。14 時、昼食。14:30 から 19 時半迄労働、そしてラゲルへと帰る。余暇には服や靴の修理に当てなければならなかった。それは冬に生き残るために特に不可欠なことであった。修理材料といえる物は殆ど無かった。針や糸などを、パンなどの他のものと換えなければならなかった。厳しい労働をする長い一日が終ると、抑留者は疲れきっていた。だがこのような逆境にも関わらず、ラゲリ所長と抑留者の主導者や能力を持つ者により”気晴らし”をすることができた。音楽や劇、スポーツ（例えば、相撲）をすることが許されていた。場所によっては他国の抑留者や住民とも試合が組まれた。

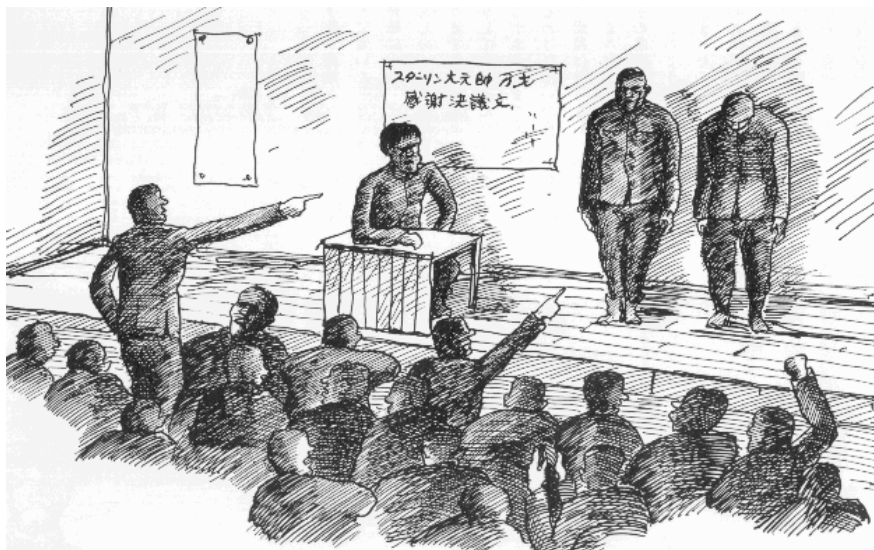


竹内は『メーデーのスポーツ大会』をユーモアと彼独自の伸びやかな表現で叙述している。(独語論文 76頁参照)「幅跳び、走り高跳び、三段跳びと障害物競走、背の高い他国の抑留者が圧倒的に優位であった。

彼等も 3~4 年監禁されていた。半裸で、突き出している骨がよく見えていた。もう一回戦が始まった。この小さくて丸い日本人は、あたかも、背が高くて細い外国人抑留者の足の間をすり抜けそうだった。彼等は思うように早く動かない日本人に困惑させられたようだ。誰が勝ったのかを確かめるのは不可能だった。小さい日

本人抑留者を放り投げたくなかったのは、間接的な感謝の気持ちだった。」これは小さい日本人抑留者を放り投げたくなかったということを間接的に表現している。

家族との通信は当初、最高25文字の葉書に制限された。最初の知らせを家族が受け取る迄、ほとんどの場合が一年以上かかっていた。全ての通信文は一年に2～4通に限られ、通信文は厳格な検閲にかけられた。1947年、検閲官は抑留者に何も言わずに約40,000通の通信文を保留していた。抑留者からの知らせを待つ家族。出した手紙の返信が届かないことに落胆する抑留者。どちらの苦悩を想像するのも難しくない。



1946年3月、ソビエトは**共産主義の再教育運動**を始めた。日本に帰還してから、抑留者は日本共産党の普及者として行動することを期待された。そのため若い抑留者を勧誘し、アクチーブの方にした。再教育された抑留者は、熱心さを明示することによって、より質が良く、量の多い食料、適切な衣類、より楽な仕事や日本への早い帰還といった特権的な報酬を与えられた。共産主義を普及させるために反ファシズム団が結成された。これはソビエト体制に相互間の不信や仲間を告発する圧力を助長させ、ラーゲリ社会に深刻な不和をもたらした。共産主義の変化運動に反対している抑留者は集会で猛烈に攻められた。佐藤は『吊るし上げ』という絵で、この会議の様子を描写している。(独語論文 78頁参照)「”反動”の烙印をおされた者の吊るし上げはじまった。

オルグが立ち上がって、被告の罪状暴露に熱弁をふるう。要所要所に配置されたアクチーブが「同感!」「意義なし!」「民主主義の敵だ!」「やっちまえっ!」と呼び、拍手をおくる。アクチーブは場内の雰囲気をもりたてる役割のほか

に”被告”への同情者を監視する。この間”被告”は数百名の視線と、悪口雑言を一身に浴びながら時間も壇上に立っていなければならない。精神的な圧迫ははなはだしく、恐怖、屈辱、憤怒、絶望感は、極限に達する。この吊るし上げが屋外で行われるときは、さらに状況がひどくなる。革命歌、労働歌を歌うスクラムの中に立ちすくみ、発狂状態におやられてしまう。吊るし上げられる”反動”の苦通はいうまでもないが、アクチーブに煽られ、”反動”を吊るし上げる大衆にとってもつらい苦行であった。」

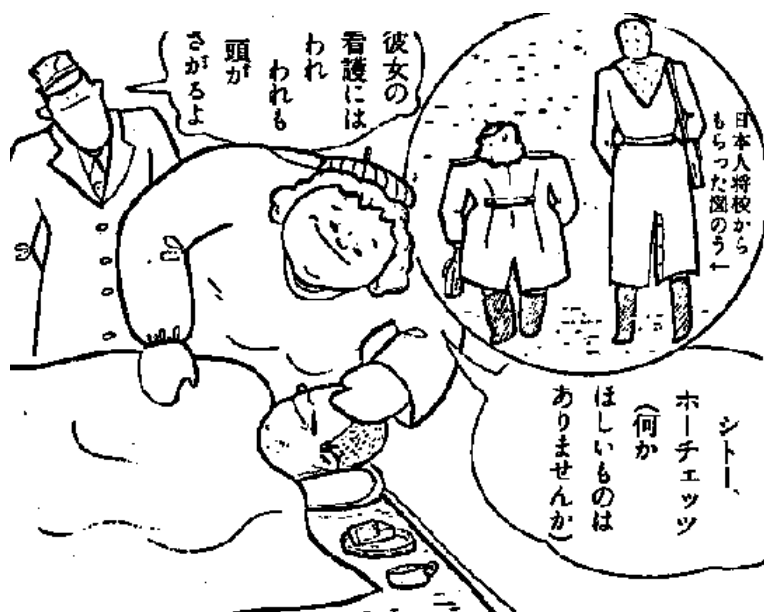
その他の共産主義化に導くための手段は、日本人抑留者によって編集された日本新聞であった。新しい情報や本に事欠いていたので、抑留者は新しい新聞を楽しみにしていた。だが、次第に多くの抑留者がそれを拒絶するようになった。その中で卓越した将校は、共産主義運動に対して頑なに反抗していた。新聞はソビエトと偉大なる先導者（リーダー）ジョセフ・スターリンを褒め称え、過去と現在における日本と米国の政府を厳しく批判し、天皇制の撤廃の正当性を示し、日本にソビエトのような社会主義社会の形成を要求した。

1945年～1946年の最初の冬、**衛生管理**が一番重要なことであった。抑留者の4分の1が厳しい冬の間でさえテントを使用せざるを得ない等、十分な準備がされていなかった。また、小さい居住地があてがわれたとしても、その多くに害虫がはびこっていた。重労働から帰っても替えの衣類は無く、体を洗うこともできなかった。トイレは野外にあった。1947年から状況は次第によくなって、抑留者自ら蒸しぶろを造ることができた。

食料不足、偏った栄養、労災、気候、不適切な衣類、衛生状態、不十分な医療、精神病など、多くの理由から健康の危機があった。仕事上の事故は、抑留者が割りふられた仕事に対して全くと言っていいほど経験が無かったことが大きな原因であった。伐採等、森林での労働、鉱山や農耕での作業は殊更に危なかった。ソビエトは労働訓練を怠り、安全対策をも無視していた。そして、病気、事故、ひどい健康状態は高い死亡率やノルマを殆ど遂行することができないという結果を導いた。戦争による膨大な損害や被害によって、ソビエトでは病院、医者、看護要員、外科手術に伴う器具、包帯材料、殺菌剤、薬、防腐剤、抗生物質、ビタミン等、全くと言っていいほど無かった。監禁されていた軍医が持ってきた日本軍の医療材料は押収されたために、軍医は仲間の抑留者に対し、何の道具も無い状態で診察し介抱し

なくてはならなかった。深刻なケガや病気以外での労働免除は許されなかった。日本軍医と看護要員の行動はソビエト政府によって厳しく監察されていた。多くの辺鄙な場所にあるラーゲリには看護要員が皆無であり、また一番近くの病院へ患者を運ぶにしても、あまりにも遠く離れすぎていた。主要なラーゲリにおいて、その状況は段々と改善されていったが、遠く離れたところにあるラーゲリでは苦しい状態が続いていた。医者にもノルマがあったことから、健康診断は型にはまった方法で行われ、抑留者の身体や精神状態に注意を払うよりも、労働に適していることを明らかにすることの方が重要であった。しかし、多くのソビエト軍医や看護師は、規制があるにも関わらず、彼等が手助けできることは何でもしてくれた。ということ多数の証言者が語っている。

竹内は、絵『優しい女医』をザルジニア女医に捧げて彼女の慈愛に溢れた心遣いについて次のような言葉を残している。(独語論文 71頁参照)



「六尺ゆたかな女軍医スモレンコーバにくらべて、病院関係の女軍医ザルジニア大尉の「ピア樽」とあだ名のついた体は、でかいお尻とともに人目を引きます。[...] わたしはソ連の軍医の中で一番好感がもてました。この二人が並んで歩くさまは、誰の目にもユーモラスな微笑を与えずにはおきません。そのザル先生、受け持ちの病院の患者が重態におちった時、自分から病人の便を取ったり、足に手をやって、「こんなに冷たくなってるのになぜ暖かめてやらん」なぞと、うれしいお叱り。いよいよもうだめだと言う時、患者に、「何でもほしいものがあつたら食べさせてや

るから」といって、今まで誰にも与えなかった上等の食べ物（ニワトリの甘煮、牛乳、卵、菓子）を与えて、軍医以下を感激させました。」

1945年～1946年、最初の冬の死亡率は10%と高かったが、1946年～1947年に7%。1947年～1948年に3.7%。1948年～1949年に2%へと下がっていった。クズネツォーフによると、61,538人の死亡者の内、30%は林業、23.2%は鉱山、15.1%は農業の作業をしていた。(1997年90頁参照) 多くの死亡原因は明確にされなかった。死亡診断書は大抵、不正確な箇所があったり、完全な誤りが記載されていた。ソビエトでの最初の冬の死亡率は一番高かった。恐らく、これが理由でその時期の絵は薄暗く重苦しい感傷を伝えているのだろう。体験者の一人は、「過剰な喫煙が体を衰弱させ、多くの死亡の原因となった。自分はタバコを全く吸わなかったので生き残ったのだと思っている。」と語っている。

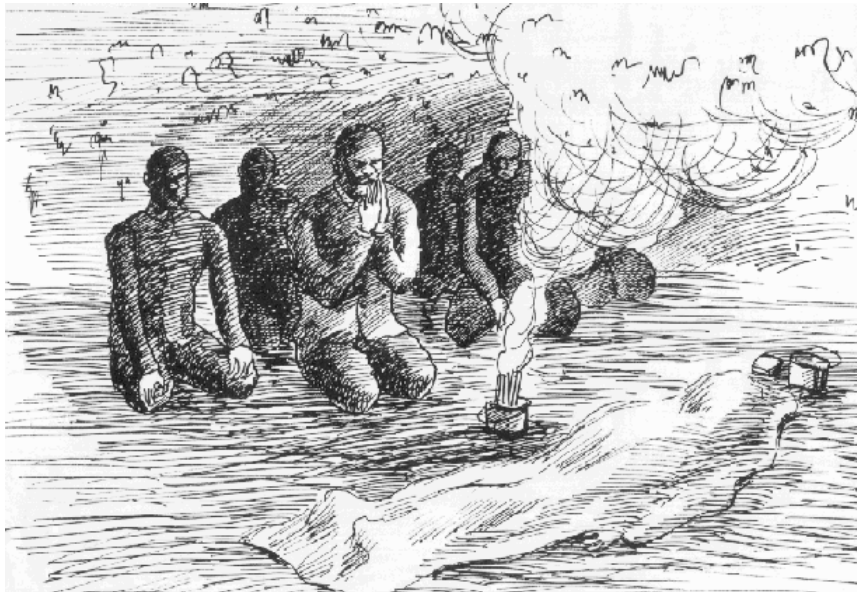
ペレストロイカの後、ようやくロシアは監禁中に死亡した抑留者の数を多少なりとも信用できる資料として提供した。クズネツォーフはソビエト政府の情報が日本政府にとって、どう信用ならないのかという例を挙げている。(1997年169～170頁参照)

スターリンの死亡の後でも、政治的な目的のために日本政府に伝えた数をごまかされた。数年間の間で死亡者の数は3,957人になると確認されたが、その後の情報によると1949年1月1日に340墓地において34,000墓碑が数えられた。1959年2月の情報では、270墓地で15,147墓碑が数えられた。矛盾していた数の原因の一つは異なる情報源が原因していると考えられている。国防省、内務省とソ連国家保安委員会（KGB）は全ての機関が違う数を記録したようだ。ある歴史家は死亡者数が10万人を越えると考えている。自分と他の歴史家の調査に基づいて、クズネツォーフは死亡者数62,068人という数に達した。この数はなんとか日本政府が推定する60,000人とほぼ一致する。

下士官と兵の間や将校との関係における語りは滅多にない。日本人は縦と横の人間関係についてはっきり話したがらないということなのだろうか。だが、共産主義再教育に起因したラーゲリ社会での緊張感と毎日の食糧の公平な配分に関する語りはとても明確である。日本人は厳しい規律を強要する将校の指令下に分かれて兵舎に住んでいたため、友情は、生き延びていくためにとても大切であった。墓地

で仲間を偲ぶことは最終的な友情の証であった。家族が墓で葬式をあげることができない、母国から遠く離れた場所での“死”は、抑留者にとって一番の気がかりであった。仲間は通夜と葬式を行っていたが、1945年～1946年最初の冬、疲れ果てていた彼等にとって、その別れの儀式を続けていくことはとても難しかった。

佐藤は『お通夜』と言う絵を次のように説明している。(独語論文 83頁参照)



「死んだ戦友の霊を慰めるために、僧侶出身の兵隊を呼んできて、お経をあげてもらった。白樺の皮を細くさいて、線香がわりにして、供物は黒パンの切れはしをささげた。白樺の線香は、黒煙がもうもうと立ち、人魂のような油煙が、舎内いっばいに舞い上がり、居並ぶ戦友たちの肩にふりかかった。通夜も、収容所生活に落ちつきがでて来てからのことで、入ソ当時は、気持ちにそんな余裕はなかった。死体は収容所内にしばらく放っておかれ、あとは作業に行つて誰もいない時に、ソ連側がいずこへともなく運び去つたり、抑留者仲間が橇で墓地まで運んだりして、弔うこともなかった。いま般若心経を聞きながら、ソ連軍と闘い戦死した戦友のことや、酷寒のシベリアで斃死された戦友のことを思い出していると、白樺の油煙が、ますます人魂のようにみえてくるのであった。恨みをのんでしんでいった戦友魂は、いまなお異郷の地に、安らぐこともなく、漂白しているのであろうか。」

スターリンが死んでから多くのラーゲリが閉鎖され、ラーゲリ近くに造られた墓地の整備をそれ以上続けられることはなかった。自然や建築物、耕作によって消し去られた。これは、最愛の人や仲間の墓を訪れ、死者の安眠のために不可欠な

追悼式をしたいと願う抑留者の家族や抑留者となった経験を持つ復員軍人等にとって、心配の種である。

郷愁とより早い帰還に対する希望は討議の絶えることがなかった。母は郷愁の象徴だった。誰もがいつ帰還出来るか、という情報を貰うことは無かった。今にでも帰還できるという知らせがあったとしても、アクチーフは最後の瞬間につまらない理由もしくは告発を悪用してこの希望を打ち破った。ソビエト政府は帰還が遅くなっている理由についてラーグリのの中に誤った情報を広げた。例えば、「日本政府は帰還船を送ることについて気を使っていない。」等とう。

4. 結論

これらの記録が殆どと言っていいほど憎悪が無く、尊厳さえをも表現していることが大変印象的である。恐らく、長い年月を経るにつれ、かつて持った厳しい感情が和らいだことによるのかもしれない。が、無理もないことながら、深い悲哀と失望の表現は多い。絵と語りの注目すべき特徴は、苦しみを耐え、規律を守り、他人の苦境を感じ、ソビエト市民の同情に対して感謝をし、自然を評価出来ることであった。抑留者はソビエト政府の宣伝活動と現実との食い違いに気づき、また、しばしば彼らは収容所所長も護衛兵も被害者であって彼等の乱暴は彼等自身の苦しみの結果だということを発見する。報告は、どのように人間が厳しい状況下で精神的に成長出来るのかということをも印象的に例証している。多くの抑留者はそれ迄知らなかった技術を発見し熱心に上達させ、そして誰もがすぐに、些細な事がどんなに大切な事になるかということを理解するのだ。全てが体験をありあり描いている。だが、例えば下士官と兵の間や将校との狭い兵舎の中での人間関係、ノルマによる緊張、飢え、病気と精神的なストレス等には言及されておらず、これらは更に知りたい事柄としてのこされている。また、「監禁には肯定的な側面もあった」という思っても見ない意見が印象的であった。

文献 106－108頁も参照せよ。

フレイシュハッカ・ヘドウィゴ「ソビエトのドイツ人捕虜達。栄養失調について」『第』(第)二次世界大戦のドイツ人の抑留者』エリクー・マシユケ編。大冊 III. Bielefeld: Giesecking. 1965。

久永強『友よねむれーシベリア 鎮魂歌』福音館書店 1999。

クズネツおツーフ・セルゲイ・I. Японцы в сибирском плену (1945—1956) 『シベリアの日本人捕虜達(1945—1956年)』[国際的な研究の中心 IGU]イルクツク 1997。

クズネツおツーフ・セルゲイ・I『シベリアの日本人捕虜達
(1945-1956年)』長勢了治訳2000年。

美瑛町・長勢了治2000。

ロッシ・ジャック『グラグ便覧。ソビエトの刑務所と強制労働

収容所における表現の百科事典』ロシア語からウイリアムズ・A・バーンズ
[Williams A. Burhans]の訳。ニューヨーク:パラゴン・ハウス1989。

佐藤清『シベリア虜囚記』未来社1979。佐藤清『シベリア虜囚の祈り』泰流
社1986。

竹内 錦司『シベリア 収容所』国書刊行会1993。

勇崎作衛『凍土の下で戦友が慟哭している』勇崎作衛 1993。

絵の目録 (独語論文の頁番号)

タイトル	画家	頁	グル ープ
入ソ第一日恐怖	勇崎作衛(1993)	43	4.3
眠り	佐藤清(1979)	45	4.3
白い絶望の道	佐藤清(1986)	46	4.3
100人兵舎	竹内 錦司(1993)	47	4.3
馬齢者と馬糞	佐藤清(1979)	48	4.4
黒パンと鮭	佐藤清(1986)	49	4.4
黒パンの分配	勇崎作衛(1993)	50	4.4.
ソビエト戦傷者は敗者に食べ物を乞食する	竹内 錦司(1993)	51	4.4
生ける屍	久永強(1999)	52	4.4
営倉	佐藤清(1979)	53	4.5
赤鼻と鬼瓦所長	佐藤清(1986)	54	4.5
何故お前は撃ったのだ	勇崎作衛(1993)	55	4.5
抑留者の強奪	竹内 錦司(1993)	56	4.5
鬼の現場の監督	久永強(1999)	57	4.5
伐採	佐藤清(1979)	59	4.6
ノーチュラボタ	佐藤清(1986)	60	4.6
バイカル湖護岸工事(ダンバ)	勇崎作衛(1993)	61	4.6
メニューを豊かにすること	竹内 錦司(1993)	62	4.6
一時の憩い	久永強(1999)	63	4.6
生と死	佐藤清(1986)	64	4.7
全然眠られません	竹内 錦司(1993)	65	4.6
力尽きれ	久永強(1999)	66	4.7
優しいお医者さん	佐藤清(1979)	67	4.8
埋葬	佐藤清(1986)	69	4.8
事故死者の解剖	勇崎作衛(1993)	70	4.8
優しい女医	竹内 錦司(1993)	71	4.8
ラーゲルの医務室	久永強(1999)	72	4.8
スズランとマーリンキ	佐藤清(1979)	73	4.9

入浴風景	佐藤清(1986)	74	4.9
白夜とカザックダンス	勇崎作衛(1993)	75	4.9
五月一日の試合	竹内 錦司(1993)	76	4.9
音楽室	久永強(1999)	77	4.9
吊るし上げ	佐藤清(1979)	78	4.10
吊るし上げ	佐藤清(1986)	79	4.10
反動と名づけて日本人吊るし上げ	勇崎作衛(1993)	81	4.10
赤い新聞	竹内 錦司(1993)	82	4.10
お通夜	佐藤清(1979)	83	4.11
仲間	佐藤清(1986)	84	4.11
アカゼ(野草)を摘む	勇崎作衛(1993)	85	4.11
ドイツ人のバルカイ	竹内 錦司(1993)	86	4.11
戦友を送る・冬	久永強(1999)	87	4.11
白樺の林	佐藤清(1986)	88	4.12
抑留者の虜情	勇崎作衛(1993)	89	4.12
ソ連女性の労働者	竹内 錦司(1993)	90	4.12
バザールの帰り	久永強(1999)	92	4.12
ロシヤ娘と抑留者	久永強(1999)	93	4.12
望郷	佐藤清(1986)	94	4.13
望郷の花	佐藤清(1986)	95	4.13
親は子の夢を見た、子は親の夢を見た	久永強(1999)	96	4.13
送還の発表	竹内 錦司(1993)	97	4.13
信濃丸甲板上の出来事	勇崎作衛(1993)	99	4.13

自己紹介



リチャード・デーラー (Richard Dähler), スイス人、1933年生まれ。
1995年に定年を迎える迄の45年間をダンザス運送会社(スイス)で勤めた。その間、スイスを中心にオランダ、イギリス、日本と国際的な舞台で活躍したが、日本支社で社長を努め、1995年末同社を定年退職し、

1996年チューリッヒ大学入学、日本学、ロシア語学、文学を専攻、
2002年チューリッヒ大学修士課程を修了。

興味 : 異文化交流、外国語、歴史。

自宅: Im Sträler 23, CH 8047 Zürich スイス

電話番号 : 0041-044-492-72-22

メール: richard.daehler@bluewin.ch

http://www.eu-ro-ni.ch/publications/Liz_jap.pdf

リチャード・デーラー・訳

須美江阪依田・校正

(11.8.2012 22.45)